

卒業制作

ルポ コロナ禍の外国に繋がりのある子どもたちへの支援現場
学校と子ども食堂への取材から
指導教官 高橋恭子

早稲田大学政治経済学部政治学科
映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ
4年 鈴木大洋

概要

本稿は外国に繋がりのある子どもたちの支援現場のコロナ禍での奮闘や苦悩を記述し、日本に必要な施策などを考察するルポルタージュである。

私自身が外国に繋がりのある子どもたちの支援に関心を持ったきっかけは高校三年生時に参加した地元の横浜市にある外国に繋がりのある小中学生を対象にした日本語・学習支援教室での学習ボランティアだ。そこで私は学校の勉強についていけない小中学生、言語問題や家庭の都合で希望の進路を諦め、ミッションスクールに進学を決めた中学生、親との関係や学校での人間関係に悩む子どもたちなどを目にした。

また日本社会を見ても、外国に繋がりのある子どもたちは今後日本経済・社会にとって大きな力となる可能性を秘めているはずだ。日本では少子高齢化が進展していることはもはや自明であり、増加している外国に繋がりのある人々や子どもたちを受け入れていくことが欠かせない。しかし日本語教育や学校教育をはじめとした行政的・社会的なサポート体制の国家的な体系化には至っていないのが現状だ。

またコロナ禍では繰り返し「国民の団結」が訴えられ、日本人の記憶や喜怒哀楽を刺激する報道やソーシャルメディア上での発言が多く見られた。その間、「団結する対象」である子どもたちを支援する団体はどのような取り組みをしてきたのだろうか。コロナ禍の終焉が見えてきた今、2年半を生きてきた子どもたちに寄り添ってきた支援団体の目線でコロナ禍を振り返り、日本社会がコロナ禍を経て山積させた問題を記述した。

第一章では外国に繋がりのある子どもたちを取り巻く問題を調査した。外国に繋がりのある子どもたちが直面する問題として「法律・制度」、「日本語」「学習」「適応」「アイデンティティ」の5つがあることが見えてきた。

第二章では外国に繋がりのある子どもたちへの言語・学習支援、居場所づくりに取り組む中華街の小学校、南吉田小学校について記述した。校長金子正人氏へのオンラインインタビューの記録や参考資料を基に、外国に繋がりのある子どもたちの支援のモデルケースとなっている南吉田小学校の様々な活動や工夫が伺えた。

第三章では子ども食堂や子ども寺子屋、フードパントリーなどを通じて外国に繋がりのある子どもたちの居場所づくりや地域の輪の形成に奮闘するノヴィーニエ子ども食堂について記述した。2度にわたるボランティアの参加や代表のトニー・ジャスティス氏へのインタビューなどを通じて、コロナ禍での様々な工夫や葛藤と外国に繋がりのある子どもたちに向けた新しい支援策がわかってきた。

最後に取材を通じて浮かび上がってきた課題である「統一的な支援枠組みの不在」について海外で活動するユニカセジャパン/フィリピンと代表中村八千代氏への取材記録を交えながら記述した。